

CoMSEP / 第 10 回日本臨床検査学教育学会学術大会 発表関連記事

臨床検査技師の質を保証するために

医学医療系 會田 雄一 助教

第 10 回日本臨床検査学教育学会学術大会が、平成 27 年 8 月 19 日から 21 日まで信州大学医学部で開催されました。今大会は「輝く臨床検査技師を育成するために—教育目標と課題—」をテーマに掲げ、最終日には「臨地実習と臨地実習前 OSCE」に関するシンポジウムが行われました。OSCE は「客観的臨床能力試験」のことであり、医師、歯科医師、薬剤師の養成においてはすでに取り入れられています。一方、臨床検査技師の養成においては 80 を超える学校のうち、わずか数校でしか実施されておりません。シンポジウムでは、信州大学医学部保健学科の実習病院における現状の報告と、臨地実習前 OSCE を実施している 2 校の紹介がありました。現在、筑波大学と茨城県立医療大学が進めている多職種連携医療専門職養成プログラム (CoMSEP) においても、臨床検査技師を目指す学生を対象にした OSCE の開発を目指しています。そこで今大会では、昨年度に筑波大学医療科学類において試行的に実施した臨地実習前 OSCE について発表を行いました。

臨床検査技師の質を保証するためには何が必要でしょうか。私たちは体調を崩したとき、医療機関を受診して医師に診察してもらいます。先生から採血をしてくるように話があり、採血室に行って血液を採った後、しばらく待っていると再び診察室に呼ばれます。そして先生はパソコンの画面に表示された検査の結果を説明してくれます。このように病院での検査は、患者さんからも医師からも見えないところで行われています。実は、こ

のブラックボックスこそが臨床検査技師が働いている検査部です。最近では採血業務も臨床検査技師が行っており、血液を採るところから検査の結果を報告するところまでを臨床検査のプロとして担当しています。こうしたブラックボックスで、万が一、プロ意識の低い方が検査に従事していて、検査に使う機器の管理が十分でなかったり、患者さんの血液の取り扱いが適切でなかったりすると、その検査の結果は信用できないものになってしまいます。さらに、体調を崩して気が滅入っているときに、心無い医療専門職の態度に遭遇すると、ますます精神的に追い詰められてしまいます。以上のようなことが現実のことにならないためには、臨床検査技師の質を保証することが当然、必要になります。

現在、臨床検査技師の質を保証している唯一のステップは、臨床検査技師国家試験です。筆記試験であるため客観的に評価できる一方、合格基準は 200 点満点で 120 点以上と、4 割が不正解でも臨床検査技師免許を取得することができます。また臨床検査技師免許は更新制ではないため、一度取得すると質を保証するステップはありません。これらのことから、国家試験だけで臨床検査技師の質を保証できているとは考えられない状況です。そこで、知識を問う国家試験と合わせて必要であると考えられるのが、“技術を評価する試験”です。そして、技術を評価する試験として活用できると思われるのが臨地実習前 OSCE です。今のところ臨地実習前 OSCE の目的は臨地実習への円滑な導入を図ることにありますが、将来的には「臨地実

習前 OSCE」⇒「臨地実習」⇒「国家試験」という3つのステップで臨床検査技師の質を保証することが望ましいと考えています。

臨地実習前 OSCE の普及に向けて、いくつかの課題が挙げられます。第一に、客観的に技術を評価するためには、評価項目を明確にして評価者によるばらつきがないようにしなければなりません。第二に、すでに専門科目の単位を修得している学生を対象にすることから、試験内容を事前に公表して自主的なトレーニングを行わせることが適切であるかということです。この点については、専門科目の各実習と臨地実習前 OSCE の関係性を明確にする必要があります。第三に、技術を評価することが目的の試験において、実施の際に手順書を学生に渡すことが適切であるかということです。このことは、学生が到達すべき水準をどこに設定するかということにつながります。そして最後に、臨地実習前 OSCE を実施した後の学生へのフォローの在り方についてです。試験を終えた学生は次に臨地実習に進むことから、到達すべき水準やフォローの在り方については、実習病院の臨床検査技師の方々とともに考えていく必要があると思われます。

臨地実習前 OSCE によって、学生が到達すべき水準を満たしていることが担保されれば、実習病院の臨床検査技師はこれまで以上に、現場での実践を通して知ることができる知識・技術を学生に伝えることができるようになります。そして、教科書的な説明を省くことができると、その分の時間と労力を学生の評価に費やすことが可能になります。さらに、これまでのように臨床検査技師が一方的に説明を行うのではなく、学生と一緒に業務を進めるようになれば、学生のプロ意識が実習を通して育まれていくことも期待されます。以上の、知識を問う国家試験、技術を評価する試験、

そして医療専門職としての適正を判断する実習という3つのステップを機能させることで、知識・技術・態度の優れた臨床検査技師を世の中に送り出すことができると考えています。

10年ほど前に、ある学会で「臨床検査技師の皆さん、そして検査部は、病院にとって“縁の下の力持ち”のような存在です」という言葉を拝聴した記憶があります。患者さんからも医師からも見えない検査部ではありますが、臨床検査技師の質を保証することは医療を土台から支えることにつながると考えています。今後、臨床検査技師と、日々のパートナーである臨床検査専門医との関係が、新たな専門医制度の下で大きく変化するかもしれません。すなわち、検査部を管理する臨床検査専門医がおらず、臨床検査技師が診療科の先生方と協力して検査の質を保っていく病院が増えると予想されます。また一方で、臨床検査会社が運営する検査センターやブランチラボの役割がさらに重要になるのではないかと考えています。こうした状況になったとき、臨床検査技師には臨床検査のプロとしての質が求められます。

【会場風景】



【OSLE 関連資料】

[平成 26 年度 OSLE 報告書「医療科学における客観的実技能力評価について」](#)

筑波医療科学 第11巻 第4号	
編集	筑波医療科学 編集委員会 二宮治彦 磯辺智範
発行所	筑波大学 医学群 医療科学類 〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1
発行日	2015年10月7日